



『播磨新宮町史』の編纂と刊行（自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業）

坂江, 渉 ; 市澤, 哲 ; 大国, 正美 ; 成田, 昌史 ; 奥村, 弘 ; 松下, 正和

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4(平成17年度事業報告書):47-54

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002220>



(2)

自治体・地域住民と連携した
新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業

『播磨新宮町史』の編纂と刊行

神戸大学と新宮町（現たつの市新宮）は、平成14年（2002）に「兵庫県新宮町における地域資源としての歴史文化遺産の調査および刊行」と題する共同研究の契約を交わした。それ以来、古代～近現代の新宮地域の歴史文化遺産について、町（町史編集室）と大学（文学部地域連携センター）が共同研究を試み、その成果を町史として刊行し、さらには町民向けに活用していこうという主旨で事業がすすめられてきた。このような自治体と大学との組織的な共同研究事業は、他に例を見ない珍しい形のものである。その大きな成果の一つが、今年度中に生まれた。

新宮町が新しく「たつの市」に生まれ変わる直前の、平成17年（2005）の9月に、『播磨新宮町史』史料編Ⅰが刊行された。本書の刊行は、今から30年以上も前に出版された『播磨新宮町史』の本文編を補う史料編の刊行という意味ももっている。各部会ごとに3年前からすすめられてきた調査研究と編さん作業にもとづき、古代（第一章）・中世（第二章）・近世（第三章）の基本史料の掲載と、その詳細な解説が付されている（全803ページ）。

以下、各時代（章）別の、今年度の活動と刊行に至るまでの経緯、および来年度の刊行がめざされている『播磨新宮町史』本文編（近現代）の編さん状況について記す。

《古代史部会》

一昨年（2004）10月21日に初校ゲラを送り返して以来、昨年（2005）の9月頃まで、合計3回の校正を重ねた。7月の半ばに、龍野市教育委員会の岸本道昭氏に「初校ゲラ原稿」での書評をお願いしたが（後述）、その時いただいた様々なご指摘やアドバイスが、古代史編の完成に少なからず役立ったといえる。

掲載した史料は、おおよそ5世紀頃から10世紀後半にいたる約500年間の、新宮町域と揖保郡に関わる諸史料である。本書利用者が、「古代の当地の『地域生活史』」の実相に迫りうるよう努力

する」という点を重んじて、通常の史料編のスタイルを改め、まずは冒頭に、『播磨国風土記』の関連史料を掲載した。第一章の節立ては、以下の通りである。

第一節 風土記の世界（史料数33）

第二節 発掘された文字史料（史料数5）

第三節 古代新宮のあゆみ（史料数15）

第四節 古代の支配制度と新宮（史料数8）

またこうした研究成果の町民への還元、および町史発刊の宣伝・広報活動の一環として、『広報はりま新宮』540号の《『播磨新宮町』へのいざない3》欄に、坂江渉部会長が「新宮町域の古代の生活史に迫る」という一文を掲載した。また2005年3月31日付け発行の『古今探訪 志んぐ草子』（新宮町）の編さんに、同じく坂江が協力した。

（文責・古代史部会長 坂江渉）

《中世史部会》

兵庫県立博物館に勤務された経歴をもつ大手前大学の小林基伸氏に書評を依頼し、11月29日に小林報告を中心とした研究会をもった。小林氏の書評の内容は別紙の通りである。小林氏の報告の内容は、（1）内容に関する疑問点、（2）編纂の方針や叙述のあり方についての問題点、の二つからなっていた。（1）については、訂正すべき箇所が指摘された。今後、正誤表の差込など、対応を考えねばならない。

（2）については、問題とされた点、評価された点ともに、小林氏の原稿に譲るが、議論を通して、大学と自治体が共同研究で自治体史編纂を行う場合、大学側が住民の目線に立って構想を組み立てることはいうまでもないが、自治体側に自治体史編纂の意義と刊行後の普及活用について具体像を持つ職員がいることの重要性が確認されたことは重要であると感じた。

自治体史編纂は、「本」を完成させることが唯一の目標ではなく、「本」の編集を通じて、どういう人を育てるのかを、今後考えていく必要がある

るだろう。

通常、このようなかたちで、完成した自治体史の書評を、編纂の過程を含めて行うことはほとんどないと思う。しかし、連携事業が連携関係の中で閉じた事業にならないためにも、このような「外部評価」が必要であることも痛感した。

なお、中世編の編集方針については、町史の中世編の扉で述べたので、ここでは省略する。

(文責・中世史部会長 市沢哲)

《近世史部会》

『播磨新宮町史』近世編の成果と課題

長年の教育委員会の継続調査と多くの町民の協力で、かつての町史編纂時に比べ、数十倍の古文書・絵図などが蓄積され、新しい事実も多く判明した。近世編は、既刊の『町史』の記述を跡づけるとともに、新事実を多く盛り込んだ。

一般に近世は、織田信長や豊臣秀吉の時代から江戸幕府の制度が存続した明治4年(1871)までが対象だが、播磨では、豊臣秀吉の諸変革と同時に、関ヶ原の戦いで軍功を立てた池田輝政の内部も重要な画期で、既刊の『町史』は池田輝政の播磨支配から近世を書き起こしている。また、たとえば平野村では近世初頭の水争いの史料がそれ以前の赤松時代の史料と一緒に巻物として保存されている。これらを踏まえ豊臣政権期の史料は中世編に収録した。

高瀬舟を節として独立し11節に全体を、支配・土地と年貢・町村政・産業・宿駅・高瀬舟・山論・水論・寺社・生活文化・絵図の11節に分け、地域的なバランスに配慮し約220点の史料を掲載した。

「支配」は町域に本拠をおいた新宮池田氏を中心にすべての村の領主変遷をたどった。「土地と年貢」では主な検地帳、代表的な村の年貢免状を取り上げた。「町村政」では町村行政と明細・救恤と騒動一揆を、「産業」では農業・加工業・流通金融に分けて史料を掲載し、それぞれのテーマについて具体的な変遷や町域での展開を紹介した。「宿駅」では制度のほか鷲崎・千本にあった2つの宿駅の展開、周辺の村との関係、景観と日常も述べた。「高瀬舟」は近世の重要な輸送手段で、町域の特色として独立した節とした。問屋と村々の対立、宿駅との競合と共存などの史料を掲載し、小規模ながら幕藩体制の骨格である宿駅制

度を揺るがしたことを述べた。山野の境界争いの多発も町域近世史の特色の一つで、地域別に地図も掲げて、境界が定まる過程を述べた。水を巡る歴史は常に水不足に悩む栗栖川流域と、河原の利用が重要だった揖保川とで異なる様相が明らかになった。また中世は禅宗が多かったのに、近世は浄土真宗が主流になった。近世が現代につながるゆえんであり、「寺社」では庶民の生活の関わりを重視した。生活文化では従来の自治体史ではあまり取り上げないような嫁の心得などから和算史料まで多様な史料を掲載した。村絵図はできるだけ多く写真と解説図を掲載した。

□新発見国絵図を口絵に、解説も充実

京都府立総合資料館に所蔵されている正保の播磨国絵図がこれまで知られている正保図の中でもっとも原本に忠実に複製されていることを確認し、巻頭にカラーで掲載した。

豊富に見つかった古文書を生かそうと、各節冒頭に節ごとの解説をもうけ、掲載しなかった史料も踏まえて、町域の近世の状況がわかるような構成にした。古文書に不慣れな人にも親しんでもらおうと、自治体史としては異例だが、史料1点ごとに簡略な解説を設けた。

□残された課題

しかし反省も少なくない。解説には意を尽くしたつもりだが、紙幅の限界もあって、用語解説などが不十分で、やはり一定の知識のある読者以外は読みづらいと思う。また内容については、「支配」では中世との連続と断絶や上方八カ国の中の位置づけなどに言及すればよりよかった。

「土地と年貢」では検地帳や免状は各村の平等掲載に重点を置いたため、例示に近かった。特定の村を選んで作表する方法があった。「町村政」では新宮町の成り立ちと展開に史料の制約もあり言及が乏しかった。「産業」では史料の乏しいなかで、史料を博搜したが、龍野・姫路・揖保川・山崎など周辺史料から見た流通構造の中での位置づけ、変化の追求や高瀬舟や宿駅との関係の連関が研究の課題として残った。「宿駅」では『龍野市史』の不十分さを新史料でかなり補った。「高瀬舟」では新宮町が積み卸し地として公認されるなど、成り立ちと展開はある程度示せたが山崎・姫路の史料をもっと検討すれば、一層よかった。

「山論」では近代・現代への展望が課題である。

「水論」では現状が大きく変わっていて、水利慣

行の詳細な解明が課題として残った。「寺社」では民俗、絵馬や仏像など文化財編との連携が同時編集のためできなかった。また「生活文化」ではくらしと文化というくり方の幅広さと具体像の難しさがあった。「絵図」では解説図をつけたが、そこから読み取りについては時間や紙幅が不足し、今後の課題として残った。

(文責・近世史部会長 大国正美)

《近現代史部会》

近現代史部会では今年度も本文編刊行に向けて、様々な活動を行った。ここでは、その活動の概要を、そこから見えてきた課題をふまえて報告する。

調査活動としてはまず、昨年度から引き続いて、明治～昭和期の新聞資料調査を行った。その結果、新宮町の歴史的特質がより明確な形で見えてきた。なお完成した目録は、補足説明を付けて記事の内容を簡単な表題で示し、年月日順に並べた。市民による一次資料の利用をはかるための導入資料としても、今後活用の余地があると思われる。

その他、各資料保存機関での調査も継続して行った。そのうち日本青年館での調査では、昭和期に全国的な郷土教育普及のための活動を行った、大西伍一（揖保郡出身）の軌跡を追った。

このような文字資料の調査の他、聞き取り調査も行った。前町長である梅村忠男氏への聞き取りでは、これまであまり資料が知られていない戦後青年団の活動に関するものなど、その内容は大変興味深いものであった。ただ、聞き取りについては、必ずしも多くの人々に対して行えなかった。文字資料の収集に加えて、今後より多くの人々に聞き取りを行う必要がある。

また、各執筆者間で研究成果の共有をはかるため、今年度は計8回の執筆委員会を開き、議論を重ねた。そこでは本文編刊行に向けて、その様式に関する議論や、順次書き上がった部分についての相互点検なども行い、昨年度に比べて開催回数も増した。

そして2006年2月には、新宮公民館で開かれた市民向けの歴史講座である「よもやま講座」において、成田雅史がその成果の一部を講演した。

近現代史部会ではこれまで、様々な歴史資料を収集してきた。その内容は多岐に亘る。本文編が刊行された後も、今回収集された膨大な歴史資料が、地域づくりのための基礎資料として、一層、市民に活用されることを願う。

(文責・成田雅史)

『播磨新宮町』史料編 I の書評会

2005年9月に刊行された『播磨新宮町』史料編 I の書評会を、各章ごと（各時代別）に評者をたてておこなった。これは学術研究上の通常の本評会という見地のほかに、当センターがすすめる現代GP事業の人材育成活動（町史の編さん成果を大学の学生・院生教育の場にも実践的に役立てる）の一環として、大学院生への実践的教育授業としても開かれた。3回の書評会のうち、古代の本評会は、町史が刊行される以前の、「初校ゲラ原稿」を用いた本評会となった。日程・評者等の概要は、次の通りである。



- ・2005年7月12日第一章（古代）岸本道昭氏（龍野市教育委員会）
 - ・2005年11月29日第二章（中世）小林基伸氏（大手前大学）
 - ・2006年1月10日第三章（近世）岩城卓二氏（京都大学人文研）
- 各評者ごとの書評内容は「(7)論考・研究ノート・史料紹介・書評」に掲載した。

平成17年度新宮文化大学校『つつじ学園』 （町史よもやま学科）への協力

『つつじ学園』（新宮町高齢者大学講座）は、生涯教育の一環として、高齢者に生きがいある充実した生活基盤を確立するため、学習の場を提供し、社会参加の推進に寄与することを目的として

開かれているものである(新宮町と新宮町教育委員会の主催)。原則として毎月第2水曜日の午後、新宮町中央公民館で開かれている(定員20名まで。開講式は別会場)。センターは今年度この学園の「町史よもやま学科」の開催に協力し、全11回の講義のうち、6名の講師を派遣した。それぞれの講師が、これまでの町史編さん活動によって見えたきた事実や研究成果について紹介した。以下、その6回の講義の日程、講師、講義内容の概略を記す。

□2005年5月11日開講式(教養講座)・奥村弘「地域歴史遺産の保存と活用について」

5月11日、新宮文化大学校『つつじ学園』で「地域歴史遺産の保全と活用について」と題した講演をおこなった。本講演は、地域連携センターによる新宮町史編纂の成果を地域住民に返していく活動の一環として行われた老人大学校の連続講座の序論をなすものである。ここでは、新宮町史の編纂にそくして、地域歴史遺産という考え方の広がり、地域歴史遺産が地域住民のコミュニティに持つ意味、日本社会なかでの地域遺産の特質、をわかりやすく解説した。

(文責・奥村弘)

□2005年6月8日松下正和「播磨国風土記の世界1」

はじめに、風土記の成立背景と播磨国風土記の特徴について説明を行った。「風土記」という用語は、もとは地方のことを書き記した書物という意味の普通名詞であったこと、「播磨国風土記」という書物名があったわけではなく、和銅6年(713)の元明天皇の詔によって、諸国から郡郷名の由来・産物・地味・山川原野名由来・古老伝承を太政官に提出を命じられた報告書(「解」)であったことなどを指摘した。

また、史料編I第1章「古代」が、播磨国風土記を重んじて、古代の生活や信仰のあり方、他地域との交流などの実相に迫るよう努力したこと、通常の史料編のスタイルを改め、各史料ごとに詳細な解説を付して理解を助けたことなどの工夫についてもふれた。単なる講演形式ではなく、新宮町域に関係する香山里・栗栖里・越部里のそれぞれ代表的な条文を受講生の市民の皆さんと共に読みながら、史料編I第1章「古代」編纂の過程で

得られた新たな成果の解説も行った。具体的には新宮町域と讃岐との交流を示す香山里飯盛山条などを取り上げ、地域間交流の諸相を明らかにし、古代での新宮町域のもつ政治的な位置について説明を行った。

最後には、この町史を活用してもらうための取組の一つとして、古代史部会が播磨国風土記を読む会や風土記中に登場する史跡を歩く会を企画するなどの取組を持続的に行う予定であること、またこれら持続的な活動を続けるためにも、地元で教育・研究施設や機関が存在することの重要性を述べて、報告を終えた。

(文責・松下正和)

□2005年7月13日坂江渉「地名説話からみる古代の信仰 一飯盛山伝承一」

『播磨国風土記』には山上や丘陵上での神の食事(食膳)にまつわる話がたくさん残されている。その中で新宮町域内の天神山に比定されている「飯盛山」の伝承にスポットをあてた(揖保郡香山里条)。讃岐との交流や美しい山容に因む伝承の形成理由のほか、とくに祭りに際し、山上で「神人の共同飲食儀礼」がおこなわれていた事実の反映であろう点を指摘した。古代の人々が神祭りの際の「食べ物」にこだわった理由としては、当時の社会の生存条件がかなり過酷であったという事実があり、それが神事後の「共食」の宴への期待、あるいは食事まつわる神話の形成につながっていただろうと述べた。最後に受講者の子供の頃には未だ残っていた、春先の「山登り」「花摘み」「花見」などの行事は、そうした風習の名残りの一つと見られると指摘した。



(文責・坂江渉)

□2005年8月10日市沢哲

講義ではまず最初に、新宮町史史料編Ⅰの中世編の節構成、個々の史料解説の読み方について説明した。続いて本論では、城山城をとりあげ、史料編に収録した史料を読みながら、以下の点について講義した。

第一に、城山城築城が地域からの人々の動員や物資の徴発を通じて進められたことを明らかにし、築城が西播磨における赤松氏の勢力拡充に大きな意味を持ったことを指摘した。第二に、臨戦態勢下の城山城の状況を明らかにし、竹木などの材木が大量に挑発されていること、これらは防御施設や燃料として使われたであろうことを指摘した。さらに、河内国金剛寺の聖教奥書史料などを引用し、駐屯する軍勢が周辺地域の山林資源を消耗し尽くし、自然環境が破壊される事例を紹介し、戦争と環境の関係性を喚起した。第三に、城山城が戦場となった嘉吉の乱をとりあげ、赤松軍の城山籠城により、播磨が「無主」の地となり、赤松討伐軍の暴力にさらされたことを例に、籠城戦を考える場合、その周辺地域の状況を組み込む必要があることを指摘した。さらに、城山落城ののち一ヶ月にわたって幕府軍の大將が播磨にとどまったことに注目し、落城後も残党狩りや占領軍の乱暴停止など戦後処理が続き、落城がそのまま終戦を意味しないことを説明した。

一般に播磨の自治体史の中世部分では赤松氏の動向をどれだけ詳しく記述したかに関心が集まりがちであり、自治体側からも「読者」は赤松に関する記述を楽しみにしていると注文をつけられることが多い。本講義では、赤松氏が関わる合戦からどう視野を広げ、中世社会にせまっていくのか、一つの事例を示すことをねらいとした。

(文責・市沢哲)

□2006年1月11日大国正美「江戸時代の新宮一都市としての観点から」

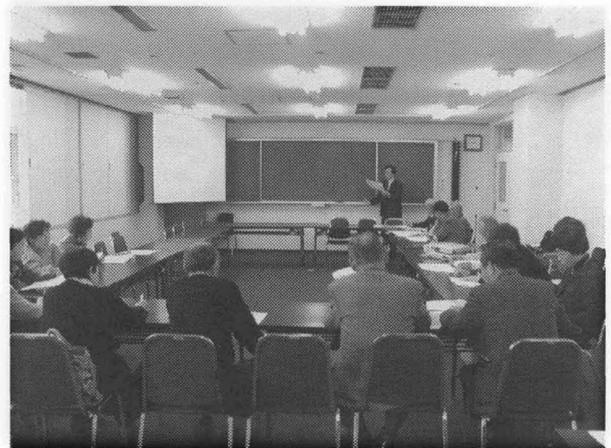
『播磨新宮町史』の成果を町民に直接語ることを目的に、「江戸時代の新宮一都市としての観点から」と題して、2006年1月11日に、新宮町生涯学習講座高齢者の部(つつじ学園)で講演を行い、新発見の国絵図をプロジェクターで映写も行った。約20人が参加。中には古文書所蔵者の田峰定子さんもおられ、町内寺院の移転や火災によ

る再建などに関して、新情報をもらい、講座終了後、現地を確かめた。

帰途、田峰定子さんのご自宅前で再び遭遇し、自宅に招かれ、龍野藩主脇坂安斐や池田家の池田頼誠の書、三日月藩御蔵の看板、田峰家系図なども拝見した。地域の住民と交流しながら、自治体史を編纂することの重要性を改めて痛感した。講演の要旨は以下の通り。

国絵図として慶長9年(1604)・寛永15年(1638)・正保元年(1644)・元禄10年(1697)・天保8年(1837)に作成が命じられたが、中でも凡例が統一された正保国絵図は画期的である。特徴として1里を6寸(約18センチ)の縮尺とし、領主に關係なく郡ごとに村の色を統一し、交通の難所や舟の岩礁、積雪で通行が不便な峠、大河の渡り方法などを描いている。

正保の国絵図としては、内閣文庫の正保国絵図が有名で、また新宮八幡神社の絵図が写しとされ県指定文化財になっているが、新宮町史の調査の過程で原本に最も近い正保国絵図を京都府立総合資料館に眠っていたことを発見した。



慶長国絵図と正保国絵図を比較では、戦国時代の惣村と江戸時代の村の違いが篠首・香山・下筋原・上筋原・時重・福栖・鍛冶屋・船渡などに見られ、新宮村は寛永4年(1627)の池田重利の陣屋移転で都市化が始まった。

新宮町の町絵図では、坂本町に職人などが集中、八木・堀・森下・井戸氏など16株が草分けで、周辺村からの移住が進んで、町場が形成された。陣屋周辺の武士居住地区は町人・百姓の居住区と分離されていて、陣屋の周囲に家臣団、その外側に町屋を配し、東は揖保川があり平城の構造になっている。

宿駅制度については千本と菟崎に宿場町があり、揖保川をはさんで東西に分かれていた菟崎駅ではしばしば紛争を起こしたが、「荷主が東の場合は東駅、西の場合は西駅」と決めた寛政5年（1793）の取り決めが重要。千本駅と菟崎駅との間の紛争では天保15年（1844）に新宮町へ直送し紛争になった。

その高瀬舟は中世に起源があり、はじめは香山付近が最上流だったと思われ、元和年間（1615-24）に山崎の龍野屋孫兵衛が免許を得て山崎まで遡りようになった。安永2年（1773）段階では出石から下余部まで23か村に舟持ちがいた。

新宮村はもともと出石問屋の専積み船場だったが池田氏御用を務める中で台頭し、弘化4年（1847）菟崎に銀15匁を払い近隣物資輸送が認められ、高瀬舟の流通拠点としての地位を確保した。

（文責・大国正美）

□2006年2月8日成田雅史「明治後期の新宮町域と郡行政を巡る動乱」

今回取り上げたのは、明治43（1910）年に揖保郡で起こった郡長排斥運動である。そこでは、郡内の町村長らが、地方改良運動を強力に推進した藤井雅太郎郡長の、揖保郡町村長会や揖保郡教育会などの会長の座、更には郡長の座をおうものとして展開した。結果、同年八月に藤井は多紀郡への転任に至る。そして、町村長の中でも特にこの運動に熱心であったのが、新宮町域では香島村・新宮村・越部村などの旧揖保郡の各町村長であった。



なぜ、町村長等は藤井郡長を排斥したのか。この問題を考えるにあたって、今回は郡会の動向を踏まえて考察をすすめた。そして、その原因は

藤井の補助金政策にあったとした。当時、新宮町域の各村会では、道路補修のための補助金を、郡会に求める動きが活発化していた。ここに、ますます増える補助金の整理を進めようとする藤井の方針（地方改良運動の理念に通底）と、町村長等の利害が、鋭く対立するに至ったのである。そして、町村長等はこのような問題の根源を、郡行政における政策決定権の所在に求め、その獲得への動きを加速化させた。その一つが共同苗代廃止を求める動きであり、それは「輿論」の後押しを受けることとなった。ここに、このような町村長等の動向は、社会的な正当性を付与されることとなった。

（文責・成田雅史）

新宮町閉町記念特別展示「ふるさとの歴史文化遺産」への協力

2005年9月30日で幕を閉じる新宮町の歴史を振り返り、ふるさとに残る歴史文化遺産を再認識してもらうため、「ふるさとの歴史文化遺産」展が、下記の日程で開かれ、当センターもその展示発表に協力した。これには完成を目前にひかえている、『播磨新宮町史』史料編Iと文化財編の発刊記念の意味も込められている。



古代・中世・近世編に収録した史料（資料）、および文化財編で取りあげられる予定の文化財のうち、新宮町の特徴をあらわすものが選定され、写真パネル・古文書などで紹介されることになった。2005年9月初旬頃から、古代・中世・近世史の3部会の部会長が中心になり展示史料（資料）の選定や助言をおこない、リード文・解説シート

・展示解説・キャプションの執筆や修正等をおこなった。その展示品リストは、巻末の参考資料欄(189～192頁)に提示した通りである。

また期間中の展示配置図、および古代史と中世史部会で作成した展示リード文、古代ロビー展示解説シート文についても巻末に掲載し、さらに絵図など視覚に訴える史料を中心に展示した近世史については、その解説文を巻末の参考資料欄に載せた(193～198頁)。

- ・期間：平成17年(2005)9月24日～30日
- ・会場：新宮町歴史資料センターロビー、特別展示室、常設展示室
- ・主催：新宮町、新宮町教育委員会(共催)
- ・協力：神戸大学文学部地域連携センター

なお合併後も、この特別展示で使用・展示された写真パネル、古文書等の大部分は、同年10月12日から12月29日まで、道の駅しんぐうの2階展示室で開かれた特別展示「新宮の古代・中世・近世」においても再展示された(たつの市教育委員会主催、神戸大学文学部地域連携センター協力)。

史料の活用に向けての研究会

『新宮町史』史料編Iの刊行後も、いくつかの部会では、共同研究活動を引き続き維持していくことになった。地域遺産としての史、資料を、住民が積極的に利用・活用できるような環境づくりに向けて、さまざまな研究をおこなっていく予定である。以下、古代史部会と近世史部会を中心に立ち上げられた2つの研究会について記す。

□風土記研究会

古代史部会のメンバーの間では、町史編さん過程の中で、『播磨国風土記』に断片的にのこされている地名説話・神話を丹念に分析すれば、当時の人々の生活や暮らしの実態が、より具体的な形で復元できることが強く認識された。これまでの古代史研究での『風土記』史料の利用のあり方は、里の比定地研究と里内居住氏族の分析にかたむく傾向が強かった。伝承そのものをいちいち眺めていく方法への関心は希薄であった。しかしこうした視角を重んじた研究をもっと深めれば、従来、ある程度抽象的であった古代村落史や共同体

論に対し、より具体的な肉付けを与えることが可能であろう。またこの方法は、多くの地元住民が抱く「地域生活史への関心」にも積極的に応えられることができ、さらに郷土の歴史に対する人々の愛着をより高めることになると思われる。

そこで古代史部会に関与したメンバーを中心に、今年度の後半から、上のような観点にもとづいた「風土記研究会」を立ち上げた。おおよそ2、3ヶ月に一回のペースで、『播磨国風土記』を中心とする古代地域史料の共同研究を続けるとともに、また関連する地名比定地の現地巡見もおこなっていくことになった。さらにこうした活動を続けることにより、一定の学問的水準を維持した、市民向けの「古代播磨地域生活史」本の刊行もめざすことが確認された。以下、今年度の当会の活動を示す。

- ・第1回研究会 2005年8月31日 研究報告：松下正和「播磨国風土記の墳墓伝承について」
(参加者／松下正和、井上勝博、高橋明裕、古市晃、中林隆之、坂江渉)
- ・第2回研究会 2005年10月5日 研究報告 古市晃「播磨国風土記と初期仏教」
(参加者／松下正和、井上勝博、高橋明裕、古市晃、坂江渉)
- ・第3回研究会 2005年10月19日 今後の会の運営と方向性に関する議論
(参加者／松下正和、井上勝博、高橋明裕、古市晃、中林隆之、坂江渉)
- ・第4回研究会 2005年12月7日 風土記研究の出版計画についての議論と研究報告：高橋明裕「播磨国風土記に見る山野占有」
(参加者／松下正和、井上勝博、高橋明裕、古市晃、中林隆之、毛利憲一、坂江渉)
- ・第5回研究会 2006年2月1日 風土記研究の出版計画についての議論と研究報告：中林隆之「古代和泉地域と上毛野系氏族」
(参加者／松下正和、井上勝博、高橋明裕、古市晃、中林隆之、毛利憲一、坂江渉)
- ・第6回研究会 2006年2月17日 風土記研究の出版計画についての議論と研究報告：坂江渉「地域の神祭りの構造と古代国家の交通(1)一敏賣崎での『神酒』と『肴』を給う外交儀礼について」
- ・第1回風土記の故地巡見調査 2005年12月18日(日)

「播磨国風土記の揖保郡越部里の故地訪問（東鯨崎駅～揖保川河畔～道の駅しんぐう「新宮の古代・中世・近世」展～播磨新宮駅」（参加者／坂江渉ほか6名の市民・学生）

・第2回風土記の故地巡見調査 2006年2月24日（金）

「播磨国風土記の揖保郡越部里御橋山の故地訪問（東鯨崎駅～いぼ地蔵～屏風岩～亀ピーク～最高峰～林田と新宮を結ぶ峠～古老からの聞き取り～播磨新宮駅）」（参加者／高橋明裕・古市晃・坂江渉）

（文責・坂江渉）

□新宮町史の発刊を踏まえた神戸大学近世地域研究会の発足

神戸大学文学部地域連携センターではたつの市新宮町と「兵庫県新宮町における地域資源としての歴史文化遺産の調査および成果の刊行」と題する共同研究事業を行い、『播磨 新宮町史 史料編Ⅰ 古代・中世・近世』を刊行したが、近世史部会では発刊後も引き続き、研究活動を発展させるため、神戸大学近世地域史研究会を発足した。

同研究会の目的は、第一に紙幅の都合上、新宮町史編集室『史料編Ⅰ』に掲載できなかった史料についての調査・解明を進めること、第二に、新宮町域を主としながらも、広く近世地域社会において考える場を持つことである。

こうした研究会を設けたのは、自治体史編纂は目的ではなく歴史遺産を発掘し将来の地域のあり方を考える手段であるという認識がある。加えて編纂の過程は地域住民との交流も希薄で、編纂室に頼りすぎた反省もある。尼崎では市史を読む会があるが、住民に自治体史は読まれているかという問題意識も持ち続けたいと思う。

また1冊の町史では史料を十分に生かせないこと、研究成果を継続して蓄積していくこと、自治体史編纂で使われた史料が今後も地域で守られ続けるよう、自治体史を作りっぱなしにしないことが重要である。新宮町は距離的に大学から遠いが、幸い、神戸大学に主要な古文書のコピーが残ることになり、研究の条件は整っている。

一方、自治体史編纂のあとは、自治体に博物館や史料館に結実した例・室として残った例・総務部などに引き継がれた例があるが、組織の残り方

によって歴史文化を生かす地域活動に大きな格差が生じている。新宮町は合併して、組織の将来はまだ見えないが、組織が続くように編纂に関わった者として、大学側からも可能な範囲で側面支援をしていきたいと考えたのである。

こうした趣旨は編纂の過程から大國が提唱していたもので、とりあえず2006年度は地域連携センターが継続することが確定し、スタートすることになった。

研究会は毎月第2日曜に開催、時間は午後2時から午後5時を予定、内容は、史料講読、研究報告、史料講読や研究報告についてフリートークをそれぞれ1時間ずつ実施する。

史料講読については、古文書初心者への指導も行い大学や時代専攻等は問わず、学生・市民の参加も歓迎した。

第1回は3月12日に、神戸大学百年記念館（神大会館）3FのB会議室を借りて開催した。神戸大学の学生・大学院生、地域連携センター研究員、岡山県在住の研究者、新宮教育事務所町史担当職員やたつの・神戸・芦屋の市民など20人が参加、予想以上に多彩な顔ぶれが集まった。

史料講読は、「池田家系譜」を取り上げ、報告は大國が設立の趣旨と意義を述べた。最後に、参加者がそれぞれ解読分をパソコンに入力していくということを確認した。

（文責・大國正美）